



# スペシャルインタビュー 菅沼愛子さん

日系不動産会社「宏徳エンタープライズ」代表の菅沼愛子さんが今年9月、その半生をまとめた自叙伝「降っても晴れても」を幻冬舎ルネッサンスより出版。夫の転勤による渡米、一人息子の障害、夫の死、狙撃事件、アメリカでの起業と、数々の困難を持ち前のポジティブ思考で乗り越えてきた菅沼さんに、出版の経緯などについて話を聞いた。

取材・文：岩本明子 写真：山田博之

をいつかまとめなくちゃと、宿題のように思っていたんです。それがある日、元シアトル・マリナーズ投手の長谷川さんと食事をした時に「なんで宏徳エンタープライズがあるの？」って聞かれて、かいつまんで時系列になんとなくあったことを話したら「それを本にして世の中に送り出してよ。今は元気のない人が世の中にいっぱいあふれているから、まとめて本を出したら元気づく人がいっぱいいるよ」って言われて。出版する

というのは自分の頭の隅にもなかったんですが、「取りあえず、そういうものを書いてみます」と。息子たちに残したいというのが一番の目的だったので、誤字脱字は専門家に直してもらっても、文章そのものは一行も変えて欲しくない。そうしたら、長谷川さんから「自費出版しかないね」って言われたんです。

## 数々の困難に直面しながらも、前向きに乗り越えていく姿勢に感銘を受けました。

人間って、ひとつ否定的な考えがくると、そこからあっという間に崩れていく。世の中には考えてもどうにもならないことがいっぱいあるでしょ。本にも書きましたが、「くよくよ考えてため息をついても何も生まれませんから、ため息をつくのは止めて深呼吸してみたら」というのが私の原点なんです。狙撃された目の手術のために病院に入院していた時に、ある方がお見舞いにいらして「菅沼さん、ご主人も亡くなられて目も撃たれて、人生散々ね」って言われたんです。でも私はその前日、

顔半分を包帯でぐるぐる巻きにされて自分の眼球がどうなってるのかわからない状況なんですけど、「まあ、頭ははっきりしてるし、歩けるし、物も食べられるし、もう今さら結婚するわけでもないし、片目がなくなっちゃってもいいか」って思っていたんです。「本当ですよ、私の人生めっちゃめっちゃ」って話を合わせたんですが、その方が帰ってから「人生って、違う考え方を持つことによって180度違った人生を歩んでいくんだ。片目でも全然平気と思える自分を作っていかなきゃいけない」って本当に思ったんです。

## 駐在員の夫の死後、親子二人でアメリカに残ることを決意し、専業主婦から会社経営者へ転身させていただきました。

主人は亡くなるまで「秀夫にはアメリカで骨を埋めさせて欲しい」と言っていたんです。アメリカという国は、身障者も健常者と同じようなことができれば同等の評価をもらえる。そんなアメリカに息子と二人で生きていくことにしたんです。

会社はビザのために立ち上げたもので、アメリカで生きていくには何とかするしかないという状況だったんです。会社の広告掲載が決まっていた電話帳が出版される直前に、代表者である自分が不動産ライセンスを取得しなければ会社が立ち上げられないことがわかった時はものすごいプレッシャーでした。

### 菅沼愛子

1944年生まれ。ワシントン州で唯一、日本人が経営する不動産会社「宏徳エンタープライズ」の代表。1970年に夫の転勤で渡米。がんを患った後、一人息子と共にアメリカで生きることを決意。1991年に会社設立。1999年、「ワシントン州不動産協会」に所属するエージェント18,000人の中で69番目の成績を収め、「トップエージェント1%」として表彰される。

一番辛かったのは、眠気と戦って勉強しなければならなかったこと。今「10万ドルあげます」って言われても、あの時の思いはしたくないですね。

## 人生で大事なことは？

今の若い人も大人も物事がうまくいかないと、「社会が悪い、他人が悪い、教育が悪い」と皆、人のせいにしてがりますね。でも、何があっても絶対に自分の責任なんです。自分を見失わないように生きていかないといけない。それともうひとつ大事なことは、人生は前向きなだけでなく、誠実に生きること。自分が常に誠実であれば、心豊かに生きていられると思います。



## この自叙伝は一人息子の秀夫さんのために書かれたそうですね。

もともとは出版する意思はなかったんです。秀夫は障害を持って生まれてきて、これから先どうことが起きるかわからないし、障害の原因が不明なだけに息子自身が将来そういう子を授かるかもしれない。私が生きているうちにはいろんなことをアドバイスしてあげたり助けたりしてあげられるけれど、いなくなったら自分たちだけで生きていかなければなりません。この本は、息子たちが人生で何かにつづかった時に開いて、「両親はこんな思いをして僕を育ててくれ、こんなふうが大変だったんだ。自分たちも頑張らなくちゃ」と、どんなことでもビジョンを持って乗り越えていってほしいという思いからまとめたものなんです。

## 元シアトル・マリナーズ投手の長谷川滋利さんのひと言が出版のきっかけに。

息子が生まれた時からいろんなことをメモしてた物が随分溜まっていたんですね。それ

↑丸善や三省堂、紀伊國屋書店など日本の大手書店のビジネス啓蒙書コーナーで大々的に取り上げられ、好評発売中。シアトルでは紀伊國屋書店で22.40ドルで販売